

【論文】

多世代共住型グループハウスに関する研究

侯 宇峰 * ・上和田 茂 ** ・船越正啓 **

A Study on Group House for living together with various generation

Yufeng HOU, Shigeru KAMIWADA and Masahiro FUNAKOSI

Abstract: This study aim at clarifying some clues to plan Group House for the aged through the research at a certain facility. The findings are as follows. Most of residents chose this facility to reduce families' task of care for them. Some residents chose in order to live in their own way. Their previous residences are near this facility. This fact proved the efficiency of scattering the facilities like this to regional communities. Most of male residents spend at their own room in the daytime, on the other hand most of female residents spend at common livingroom. They are such a contrast. All of residents live independently and in their own way. Most of female positively contact with other female residents in this facility and friends outside of this facility, on the other hand most of male residents contact with their just own wife and family. This fact show male residents can not adapt themselves to the facility like this. It depends on their opinion and work condition whether four single female residents positively contact with the aged in this facility. There are much contact between the aged and kids living in this facility. This thing produce an atmosphere like a big family. Most of female residents positively assist for helper, but most of male residents is negative about it. This facility and its operation is highly rated by most of residents. More detailed study from the angle of "gender" and "living together with various generation" is necessary.

Key Word: the aged, group house, home care, gender, living together with various generation

1. はじめに

介護が必要な高齢者のためのあるべき居住形態は、家族の介護負担の軽減や介護の効率性を重視する「施設ケア」と、高齢者の主体性と尊厳を重視する「在宅ケア」との間で揺れている。一方、両者の欠点を共に克服可能な第3の方向として、在宅の要素を取り入れ、小規模で各地域に分散的に設置され、グループハウスやグループリビング等と呼ばれる高齢者居住施設が近年増加の傾向にあり、大きな関心が寄せられている。

本研究は、この種の施設の一事例である愛知県長久手町に設置された「B長屋」を対象とする居住生活調査を通して、以下に示す4項目の在宅的要件についてその実現度および満足度を測ると共に、共同居住による生活および人間関係上の諸問題とその要因を明らかにし、高齢者の多様性に即した住まい形式の方向性を究明することを目的とする。

特に、これまで注目あるいは問題視されることがま

* 工学研究科社会開発・環境システム工学専攻

** 建築学科

れであったものの、今後、当該施設の普及に伴い期待が高まるであろう「多世代共住」の可能性、また問題が顕在化する恐れのある入居者の「ジェンダー」、すなわち男女混住に伴う軋轢に焦点をあて考察を行う。

なお、本編では研究の枠組、施設概要および生活実態、入居高齢者間の交流、家族との接触、単身者および家族世帯との接触と交流、役割遂行および相互扶助、施設に対する評価について報告を行う。

【主たる在宅的要件】

- (1) 空間（住み慣れた居住環境に近似し、自分の居場所が確保されていること）
- (2) 時間（自律的な生活時間・生活リズムで、周囲に気兼ねなく生活ができること）
- (3) 交流（施設内および周辺地域との間でなじみの人間関係や家族的な付き合いが維持されること）
- (4) 役割（他人の役に立つ役割を持つことにより自己の存在感を感じることができると）

2. 調査概要

2.1 調査対象施設の概要

【法的な位置づけ】調査対象として取り上げた「B

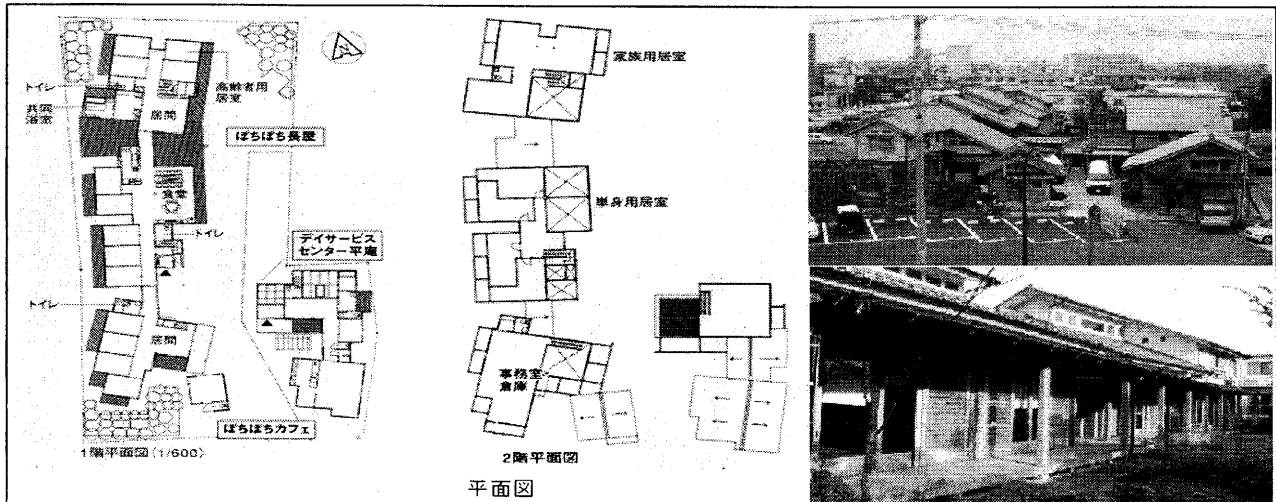


図1 B長屋の概況

長屋」は制度的には福祉施設ではなく集合住宅であり、福祉施設としての補助金獲得の道も閉ざされている。高齢者のみならず若者や家族世帯が共に居住していることがその理由である。しかし、居住者に対しては24時間体制による介護が保障されており、「介護付きアパート」などと呼ばれている。法的には訪問介護システムの活用によるが、実質的には交代で常時2～3名のヘルパーが働いている。食事は、3食ともに隣接するデイケアセンターに委託し配給を受けている。単身者および家族世帯には食事サービスは行われていない。

【居住者】調査時点で高齢者が男6名、女7名、計13名、20～30歳代で社会人の単身女性4名、夫婦子供4人家族1世帯で、「多世代共住」が行われている。なお、家族世帯の夫婦は共に本施設の設置法人の職員である。

【立地・施設概要】本施設は、名古屋市地下鉄東山線の終点「藤ヶ丘」から徒歩8分、周辺には分譲マンションが建ち並ぶ利便性の高い住宅地に立地。延床面積579.1㎡の木造2階建て、居室数は1階に高齢者用13室、2階に単身者用4室と家族世帯用1住戸からなる。居室面積は、高齢者用約10㎡(6畳)、単身者用平均18㎡、家族世帯用約67㎡である。また、同じ敷地内の別棟にデイケアセンターが併設されている。

【設置運営主体・費用】設置主体は「社会福祉法人Tの杜」、運営主体は「NPO・Z物語」。入居費用は家賃月額6万5千円、食費および運営管理費9万円、合計15万5千円。訪問介護費用は、介護保険および必要に応じて自己負担。単身者の家賃は6万円であるが、高齢者との交流を条件に3万円の減額となっ

ている。

【施設の平面形態】3ブロックに緩やかに分割された住棟が1階において1本の廊下で連結され、1階は1ブロック4～5室の高齢者用居室、2階に単身者および家族世帯用が配置されている。共用空間は、中央のブロックに食堂(居間兼用)と台所、南北2つのブロックにそれぞれ小居間、北ブロックに浴室が配置されている。便所・洗面は、高齢者用として各ブロックに共用で1ヶ所ずつ計3ヶ所、単身者および家族用は各居室・住戸専用に設置されている。長屋は「一つの家」という主旨から取って高齢者用居室には専用便所・洗面が設置されていない。浴室も共用。単身者および家族用にはそれぞれ専用台所が設置されている(図1)。

2.2 調査方法

平成16年10月29日～31日の3日間、入居者および職員を対象とする行動観察調査およびインタビュー調査を行った。行動観察は、4名の調査員の連携により、対象者全員の1分単位の行動を記録し、行為場所、行為内容、行為継続時間、交流相手等を記録した。インタビュー調査は、1人30分程度を目安とし、入居者の属性および入居理由、入居者間および家族との接触・交流・生活支援、役割遂行の実状、満足度および施設評価等について聞き取りを行った。

3. 入居者の特性からみた長屋の存在意義

3.1 入居者のプロフィール(表1)

入居高齢者は男性6名、女性7名、計13名。男性1名には介護の妻が同居。年齢は、75歳未満の前期高齢者4名、75歳以上の後期高齢者9名。要介護度は、「1」から「5」までほぼ均等に分布。認知症の高齢者は、軽度2名、中度2名と比較的少ない。配偶者

の有無については、男性入居者の場合、その妻はほとんど健在でほとんど自宅居住であるが、女性入居者の場合、夫婦入居者の1組みの事例を除けばその夫は死別等により存在しない。子どもは、13名のうち8名が有しているが、他5名にはいない。なお、調査は、入院中1名、寝たきりの1名を除く11名を対象に行った。なお、単身者および家族世帯のプロフィールは前述のとおり。

3.2 入居理由 (表2)

B長屋への入居理由は、男女共に、「在宅介護による家族の介護負担の軽減」が約6割を占め、最も多い。この場合、男性では妻の負担軽減、女性では子どもの負担軽減が主である。そのほか「一人で気ままな生活をしたい」という自立志向および「身寄りがいないから」とするものがそれぞれ2割となっている。

いずれのケースにおいても、長屋への入居をきっかけに、自宅居住時では頻りにみられた家族とのあつれきが解消され、子どもの配偶者、特に嫁との関係も好転し、入居者本人の情緒も安定化に向かっている。

3.3 前住地からみたB長屋と地域とのつながり

リロケーションを経験すると高齢者の認知症の度合いは進むといわれるが、入居者の前住地は、長久手町内が約半数(7例)、隣接する名古屋市長東区(4例)および瀬戸市(1例)と近

接地がほとんどであり、施設入居による強い違和感を抱かせないで済んでいる。また、それが入居者の外出が多い要因ともなっている。

4. 入居高齢者の生活場所と生活リズム

4.1 主たる生活場所からみた生活のパターン

行動観察により、各高齢者について、午前7時直前から午後7時までの約12時間において営まれた行為の場所を確認し、それぞれの場所において費やされた時間の比率を図2に示した。

男性の場合は、1名を除いて居室で過ごす時間の割合が7割から8割、共用空間である食堂で過ごす割合が2割前後と、居室で過ごす割合が圧倒的に多い。他の1名は居室と食堂が相半ばする。男性の中では特異な存在であるが、この事例は夫婦入居

表1 入居高齢者のプロフィール

呼称	性別	年齢	入居時期	介護歴	移動手段	痴呆程度	配偶者の有無	子どもの有無	前住地	備考
NT	男	84	2003.11	2	接歩	なし	有	有	名古屋市(名東区)	
KY	男	79	2003.4	2	接歩	なし	有	有	長久手町	
IW	男	77	2003.1	5	車イス	なし	有	有	長久手町	
SU	男	71	2003.4	5	寝たきり	不明	有	有	名古屋市(名東区)	介護者である妻が同居
TA	男	70	2003.8	4	車イス	なし	有	有	長久手町	
TT	男	67	2003.8	3	車イス	なし	有	有	瀬戸市	
KM	女	99	2003.1	3	手押し車	軽度	無	有	名古屋市(名東区)	
MK	女	94	2003.1	4	車イス	なし	無	有	名古屋市	
NH	女	94	2004.6	1	接歩	なし	無	有	名古屋市(名東区)	
NS	女	89	2003.3	3	車イス	軽度	無	有	長久手町	
FT	女	79	2003.1	4	車イス	中度	無	有	長久手町	
IT	女	77	2003.10	3	歩行器	中度	有	有	長久手町	
KT	女	71	2003.1	5	車イス	なし	有	有	長久手町	

表2 入居理由

性別	家族の介護負担の軽減		個人生活の確保(気ままな生活)	身寄りなし
	主として配偶者	子ども		
男性	4	0	2	1
女性	1	4	1	2
計	9		3	3

注) 複数回答を含む

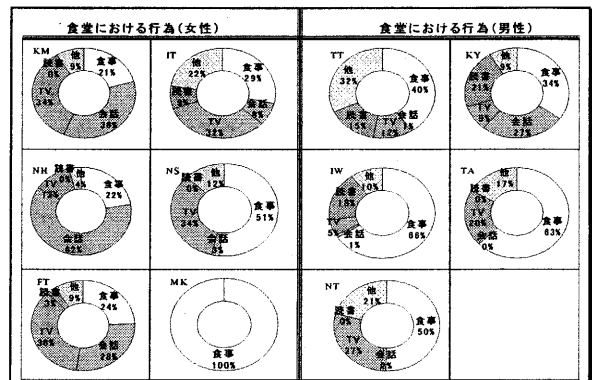


図2 昼間の滞在場所

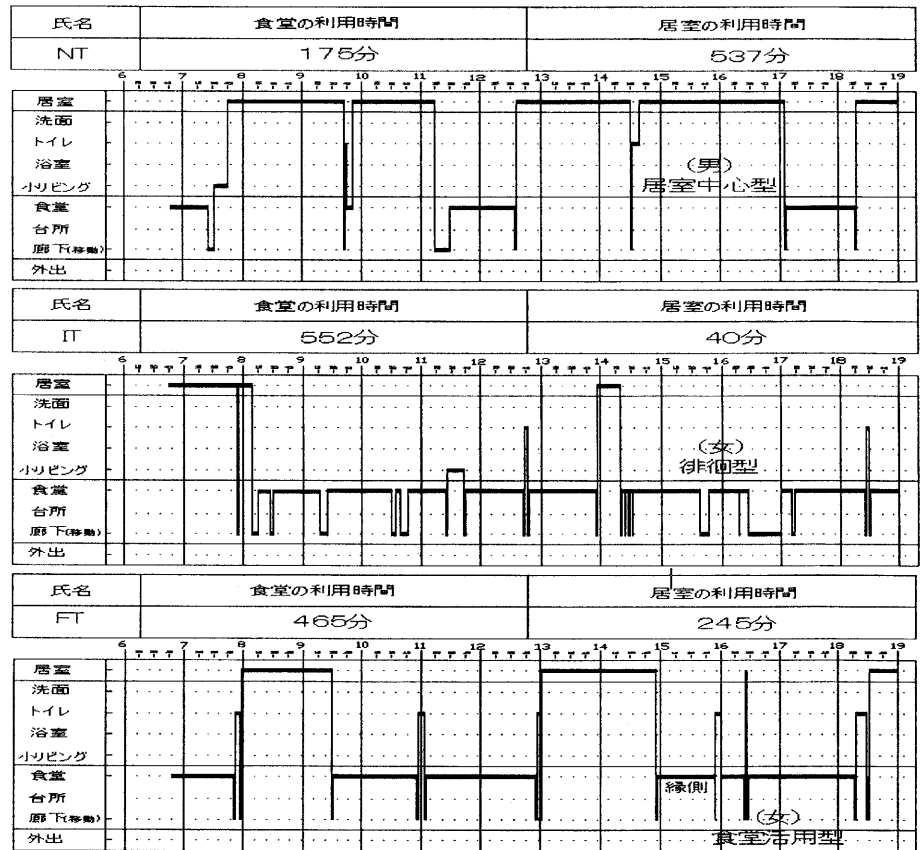


図3 生活パターン類型の事例

者の夫であり、妻の交流関係に影響された可能性が高い。

女性の場合は、病気の1名を除く全員が食堂あるいは食堂付近で過ごす時間の割合が5割あるいはそれ以上を占めている。そのうち1名は昼間のほとんどの時間を食堂あるいは食堂付近で過ごしている。

このような昼間の生活場所を指標に入居高齢者の生活パターンを類型化すると、「居室中心型」、「食堂活用品型」、「徘徊型」の3タイプに区分することができる。男性は殆ど「居室中心型」、女性は殆ど「食堂活用品型」と極めて対照的である。また、昼間の大半の時間を食堂で過ごす女性1名は「徘徊型」である。

(表3)

図3に各生活パターンの典型的事例を示した。「居室中心型」の事例では、朝昼晩の食事の時以外はほとんど食堂に姿を現すことがなく、大半の時間を居室内で過ごす。他の高齢者のようにデイサービスに出かけることもない。「食堂活用品型」の事例では、1日の大半の時間を食堂で過ごし、他人との会話を楽しみ、TV視聴等に費やしている。食堂の一角にあるテレビコーナーはお気に入りの場所でもある。また、天気の良い日には食堂前の縁側に出て過ごすことも多い。入居者で唯一の「徘徊型」の事例では、昼間はほとんど居室に居ることはなく、食堂で何となく過ごすほかは、食堂付近および廊下を散歩する毎日を送っている。

4.2 食堂・居間における生活行為

食堂・居間の利用内容の詳細をみると、男性の場合は、食事で食堂を使用する時間の割合が大半である。そのほかTV視聴や新聞を読むなどの行為がわずかながらみられるものの、女性を含む高齢者との会話は1名を除き皆無に近い。この1名は先述の夫婦入居者の夫であり、TV視聴や読書はもとより、妻を媒介として他の高齢者(主として女性)との会話をよく行っている。

女性の場合、食事での利用が相対的に少なく、その他の行為に費やす時間が長い。特に、男性と異なるのは、お互いの会話が高い比

率で出現している点である。中でも、KM、NH、FTの3名における会話の時間比率が高い。この3名は、病気中のMKを含み日頃から接触度が高い仲良し4人組を形成している。(図5)

表3 生活パターン類型

生活拠点	性別	男性	女性	計
居室中心型		4	0	4
食堂活用品型		1	5	6
徘徊型		0	1	1

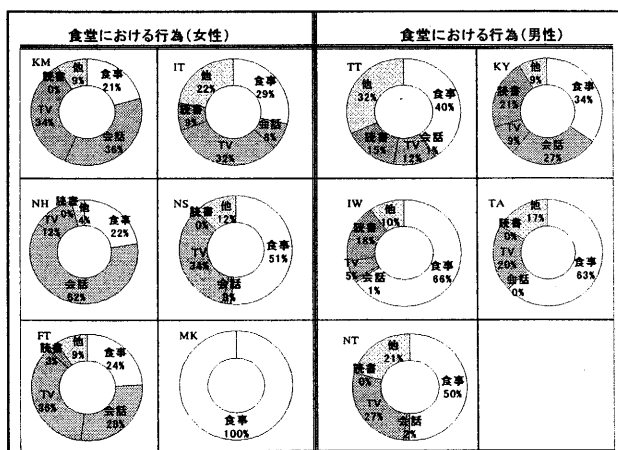


図4 食堂・居間における生活行為

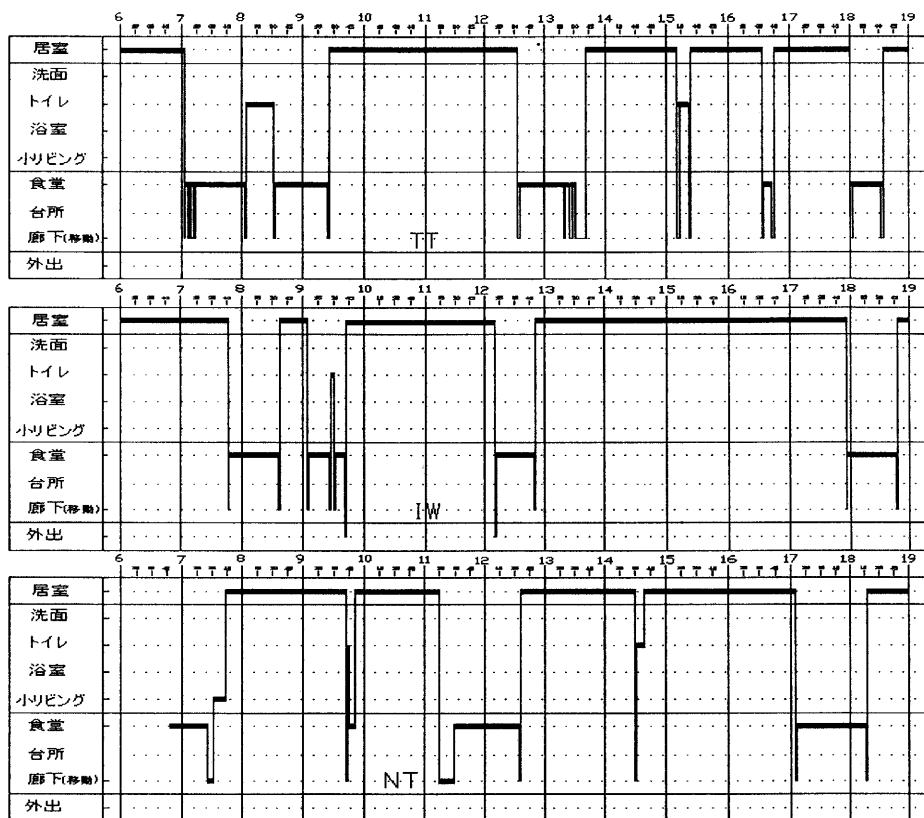


図5 生活時間の自立性

4.3 生活時間・自己管理からみた生活の自立性

本施設は介護施設ではないことから生活規則はほとんどなく、全て自己管理に委ねられている。そのことが高齢者の自立性や主体性を育てている。訪問介護も、要介護度と本人の希望に基づき自己決定を行っている。朝昼夕の食事時間も供給開始時刻は決まっているものの、実際の食事時間は図5に示したように、各人まちまちで、自分の生活リズムに応じてとっている。

5. 交流の実相

5.1 交流の相手からみた交流のタイプ

主たる「交流の相手」の点からみると、入居高齢者は4つのグループに分類することができる。(表4)

第1のグループは、高齢者同士および単身者と頻りに交流する入居者群であり、仲良し4人組の女性達である。第2グループは、高齢者および単身者との交流を行うものの、デイケアセンターに週1~2回通い、そこでの交流を主とする入居者群である。

第3のグループは、入居者のいずれともほとんど接触がなく、デイケアセンターに通う一方、本人の家族の来訪頻度が高く、家族との接触・交流が中心となっている入居者群であり、全て男性入居者である。第4のグループは、他人との接触がほとんどなく、家族との接触・支援に依存して毎日の生活を送っている男性1名である。

5.2 家族の来訪頻度および接触 (表5)

子供がいない、あるいは遠方に在住するなどのケースを除けば、家族との日常的な接触は全般的に密である。本施設が本人の前住地あるいは家族の現住地に近く、家族の来訪が比較的容易であることが一因であろう。ただし、全般的に密な中にもある程度の差異がみられ、毎日あるいは週2~3回と頻りに来訪を受けるケースと週1回程度にとどまるケースとに二分される。前者はほとんどが男性高齢者であり、来訪するのは配偶者である妻である。後者は夫婦入居者の男性を除けば全て女性高齢者であり、来訪するのはそれぞれの子どもである。両者の差異は来訪者が妻か子どもかの違いに帰するとみてよいが、前述の他人との交流実態と重ね合わせてみると興味深い推察ができる。すなわち、前者の場合は、配偶者による高い頻度の来訪により、必ずしも他の入居者との接触・交流への強い指向が生じ難いこと、一方、後者においては、子どもの来訪頻度の少なさを施設内における他人との接触・交流によって補完しようとする指向が強いのではないと思われる点である。ただし、この点は女性特有の現象であると解釈することを排除しない。

表4 交流関係

相手	高齢者同士	単身者	デイセンター	家族
高齢者				
KM(女)	◎	○		○
FT(女)	◎	○		×
MK(女)	◎	○		◎
NH(女)	◎	○		○
KY(男)	◎	○	○	×
IT(女)	▲	▲	○	×
NS(女)	▲	▲	○	○
TT(男)			○	○
NT(男)			○	◎
TA(男)			○	○
IW(男)				◎

表5 家族の来訪頻度

相手	毎日	週2~3回	週1回	月1回	ほとんど こない	子ども なし
高齢者						
KM(女)			○			
FT(女)						○
MK(女)	○					
NH(女)			○			
KY(男)						○
IT(女)					○	
NS(女)			○			
TT(男)			○			
NT(男)	○					
TA(男)		○				
IW(男)		○				

5.3 入居高齢者の交流からみた本施設の特徴

以上のような入居者間および家族との接触・交流の実態からは、各入居高齢者が本施設に何を求めあるいは期待して入居に至り、いかにその目的を達成しているか、その一端をうかがい知ることができるが、それは2つの方向に大別される。一つは、本施設の設置主旨にも明示されているように、「本施設を一つの大きな家として、拡大家族にも似た親密な生活集団を指向する」グループであり、他方は「自宅に住んでいた時のように、家族との密な接触を維持しつつも、家族の介護負担の軽減のために本施設を活用せんとするグループ」である。この指向の違いが、前編で指摘した生活パターンの違い、すなわち「食堂活用型」か「居室中心型」かの違いをもたらしていると解釈することも可能である。入居者は等しく在宅の雰囲気求めて入居したとはいえ、それぞれ求める在宅的要素の違いにより生活指向も異なり、したがってそのことが施設内における生活パターンに影響を与えているといえる。

ところで、このような相異なる指向が特に大きな問題もなく同居している点こそが本施設の特徴といえるかもしれない。本来、本施設は在宅の要素を取り入れること、すなわち高齢者の自立性や主体性あるいは尊厳を重視した生活空間を目指したわけであり、異なる生活指向が混在できていることは、従来の施設ケアにありがちな画一的なケアが排除されて

いることの証とも受け取れるはずである。

5.4 男性高齢者における順応性の低さ

上記のように、本施設が多様な指向および生活パターンに柔軟に対応できる施設であることは肯定的に評価できる。とはいえ、同じ屋根の下に暮らしながら他の入居者との接触・交流がほとんどみられないのは奇異なことでもある。しかも、その全てが男性高齢者である点に着目すれば、男性特有の順応性の低さに由来することと捉えることもあながちはずれなこととはいえず、今後、この種の施設のあり方を考える上での重要な問題点として認識する必要がある。

5.5 居室の位置が交流に与える影響

上記のような男性高齢者における他の入居者との接触・交流の乏しさには、本施設の平面構成および男性高齢者の居室の位置がかかわっていることも推察される。というのは、共用空間である食堂をよく利用している「食堂活用型」の高齢者の居室は、食堂に最も近いBブロック、あるいは玄関に向かう動線の途中に食堂が位置するCブロックに含まれている一方、「居室中心型」の男性の居室は、食堂までの距離が相対的に遠いAブロックに位置しているからである。(図6)

なお、AブロックおよびBブロックに設置された「小居間」は日常的にはほとんど利用されていない。共用空間の段階性を考慮して設置されたようであるが、4室に1ヶ所という単位設定が小さ過ぎたのか、人が集まる手立てや演出に乏しいせい、その原因は特定し難い。今後の考察に待ちたい。

5.6 食堂における座席選択と交流関係の相関

前述の交流関係は、食事の際の食堂における高齢者の座席位置の選択にも影響を与えている。図7に示すように、仲良し4人組の女性群をはじめBブロックおよびCブロックの入居者は、それぞれ1つのグループを成し、固まって席につき、また食事時の会話も尽きない。一方、Aブロック居住の男性4名は、同じエリアにまとまって座っているかのように見えるものの、互いにかかなりの距離を隔てて席につき、会話もみられない。入居者全員との疎遠な関係が露わとなり、施設内において孤立していることがうかがわれる。

5.7 单身女性入居者との接触・交流

本施設の2階に4名の单身者が入居している。玄関、食堂・居間、浴室は高齢者と共用であるが、食事サービスは受けていない。この单身女性と高齢者との接触・交流度は両極に分かれている。毎日の勤務からの帰宅後あるいは休日に食堂等で高齢者と頻

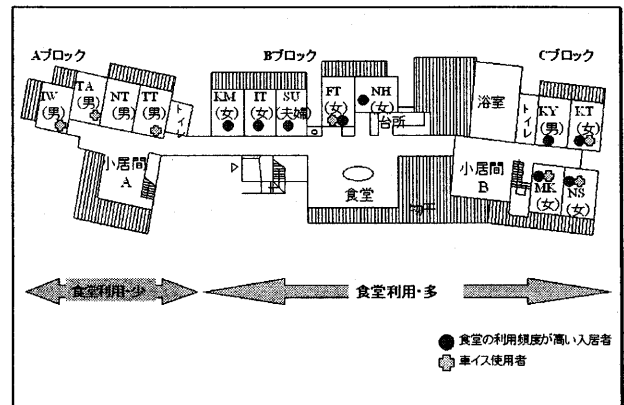


図6 居室の位置と食堂居間の利用頻度(交流の有無)との相関

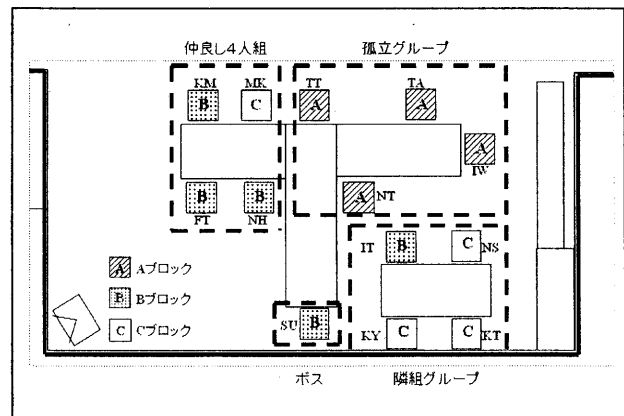


図7 食堂における座席選択と交流関係の相関



写真1 单身者と高齢者の接触・交流

繁に接し、場合によっては様々な生活サポートをボランティア的に行っている女性が1名、そこまでの支援には至らぬものの休日や時間的な余裕がある時に高齢者と一緒にお茶を飲み会話をするなど、接触度が高い女性が1名いる。(写真1)

他方、他2名の女性は高齢者との接触がほとんどみられない。強制的ではないものの高齢者との接触に同意して本施設に入居したはずではあるが、本人の勤務実態および生活時間等が高齢者との接触時間を確保することを困難にしているようであり、約束が空洞化している。このことについて、本人達も理想と現実との狭間で呻吟している様子もみられる反面、高齢者と同居していることだけでも高齢者にとって意味がある旨の考え方が吐露されるなど、その心中には複雑なものがありそうである。いずれにせよ、高齢者との接触・交流のあり方についての認識と行動には大幅な差異が認められる。事例が少ないことから断定することは避けなければならないが、共住することの効果がみられる反面、その難しさも痛感させられる。

5.8 家族世帯（子ども）等との接触・交流

本施設に居住する家族世帯の夫は本施設の責任的な立場にあり、また妻はヘルパーであることから、なにくれとなく高齢者への支援を行っている。また、その子どもおよび職員やボランティアが連れ添ってくる子どもと高齢者との接触・交流が頻繁にしかも実に自然なかたちで展開されている。特に女性高齢者との間には写真2に示すように多面的な接触・交流が行われており、「大家族」的な雰囲気を醸し出している。（写真2）

6. 役割遂行・相互扶助

社会的な役割を失うことは高齢者に自らの存在感を喪失させ、気力を衰えさせる一因となる。したがって、何らかの役割を果たし、精神的な充足を感じさせる機会を創出することが望まれる。観察によれば、女性4人組が定期的に食器洗いの手伝いを、ある女性は洗濯後のナプキンの折りたたみ作業を担当し、またある女性は庭で摘み鉢に生けた花を食堂・居間に飾り、皆の目を楽しませるなど、思い思いに役割を果たしている。しかし一方、男性の場合は、夫婦入居組の1名を除けば、このような役割を全く果たしていない。上記1名は、お菓子作りなど地域の人を招いて行われるイベントやその準備過程などに際して、職員の手助けを行う場面がみられた。男性高齢者の孤立化を防ぐ意味でも、今後、様々な工夫により役割を履行できるような機会を作ることが強く望まれる。（写真3）

7. 施設への評価

施設・設備については、居室の面積（約6畳、写真4）が狭いと訴える高齢者が3名。特に収納空間がないことに不満が強い。便所、洗面、浴室の共用については1名を除き大きな不満はみられない。（表3）



写真2 子どもと高齢者の接触・交流



写真3 高齢者の役割遂行
表3 施設への評価

性別	呼称	施設への満足度			ヘルパーへの評価		総合評価 (5段階)
		居室の広さ	WC洗面の用	その他の設備			
男性	NT	×	×	×	ヘルパーを利用せず		—
	KY	×	○	○	特に不満なし		○
	IW	▲	○	○	ヘルパーはよくやっていると高く評価		◎
	TA	○	○	○	特に不満なし		○
	TT	○	○	○	ヘルパーを高く評価、天国にいるみたい		◎
女性	KM	○	○	○	世話が行き届いている		○
	NH	○	○	○	冷たくもなく、あたたかくもない		▲
	NS	○	○	○	特に不満なし		○
	FT	○	○	○	ヘルパーの介助に依存		○
	IT	○	○	○	不明		?

本施設の構造は木造であり、仕上げも荒削りな木質系の材料が多用されており、高齢者にとってなじみ深い外観および室内景観が得られているが、防音性

能に欠け、隣室の音や声が筒抜けである。しかし、高齢者からは特段の不満は聞かれず、むしろ、安心感があるとの反応である。ただし、女性単身者の中にはプライバシー保護のうえで問題があると指摘するものもある。

ヘルパーに対しては、介護専用施設にありがちな「命令調」や「指示調」の言葉遣いがなく、高齢者を特別扱いせず普通の大人として対応してくれるとの声が多く、全体としてヘルパーの情緒的対応レベルには高い評価が与えられている。また、総合評価も概ね高い。



写真4 高齢者の居室

8. まとめ

本施設への入居理由は、「家族の介護負担の軽減」が最多で、気ままな生活を目指した「自立志向」もみられる。前住地は地元で地域分散型の特長が活かされている。昼間の生活場所は、男性は「居室中心」、女性は「食堂・居間中心」と対照的。生活時間は各自多様で自律的な生活が営まれている。交流の相手は、女性は「施設内の女性高齢者」および「施設外における友人」、男性は「来訪する家族、特に妻」と対照的。男性の順応性の乏しさおよび施設への不適応現象が推測される。共住する単身女性4名の高齢者との交流は、本人の就業条件等の理由から積極派と消極派とに二分される。家族世帯の子どもと女性高齢者との接触頻度は高く、大家族的な雰囲気形成されている。役割遂行については、女性は積極的であるが男性は皆無に等しい。施設内容・運営に対する評価は全般的に高い。考察の結果、「ジェンダー」と「多世代共住」が今後さらに追究すべき課題であ

ることが明らかになった。

謝辞

調査分析にあたって、本施設の入居者の皆様、横山氏をはじめヘルパーの皆様、NPO法人の遠藤学氏、日本福祉大学・毛利志保氏に多大なるご協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 三浦研・中村大蔵：ひだまりの中でおしゃべり、会話の分析から見たグループハウス・ケアの特徴、のびのびクラスブックレット④、地域型高齢者協働居住推進委員会、2000
- 2) 石東直子・中村大蔵：いつでも誰かと会えるしいつでもひとりになれる、被災地における光栄コレクティブハウジングの展開、地域型高齢者協働居住推進委員会、2000
- 3) 早川裕子・GLネット：老後は仲間と暮らしたい、主婦の友社、2000
- 4) 10人10色の虹のマーチ、高齢者グループリビング[COCO湘南台]、2000
- 5) 広井良典編著：「老人と子ども」統合ケア、新しい高齢者ケアの姿を求めて、中央法規出版、2000
- 6) 近藤・大江：高齢者グループリビングに関する基礎的研究、日本建築学会 大会学術講演梗概集(北陸)、pp345-346、2002.8
- 7) 中西真弓：新しい高齢者居住のかたちとコミュニティの課題、広原ほか編 著「少子高齢時代の都市住宅学」所収、pp127-143、ミネルバ書房、2002.7
- 8) 外山義：自宅でない在宅、高齢者の生活空間論、医学書院、2003
- 9) 在塚礼子：新たなパラダイム下の高齢社会のデザイン、建築雑誌、第118集 1510号、pp14-15、日本建築学会、2003.10
- 10) 袖井孝子：高齢期の家族と住まい、建築雑誌、第118集 1510号、pp18-19、日本建築学会、2003.10
- 11) 三浦研・京都大学旧外山義研究室：グループハウスという住まい方、震災が生んだ介護力ある協働居住、建築雑誌、第118集 1510号、pp32-33、日本建築学会、2003.10
- 12) 井上由紀子：いえとまちななかで老い衰えてゆくこと、建築雑誌、第118集 1510号、pp42-43、日本建築学会、2003.10
- 13) 遠藤学：高齢者も子どももOLも「ほどほど」に「ぼちぼち」とくらすのサ、煩わしくも長閑なコミュニティ「ほどほど横丁」の実践、月刊総合ケア、第13巻第11号、2003.11
- 14) 岡田光彦：高齢者介護の課題と今後、公共建築、第46巻第2号、pp10-14、2004.4
- 15) 毛利志保：住まい化への整備過程からみた高齢者居住施設のありように関する研究、学位論文(私家版)、2004.3
- 16) 健康長寿のまちづくり多世代交流事例集・地域をつくる2003年度版、社団法人シルバーサービス振興会健康長寿のまち推進センター、2004.3
- 17) 荒川尚美・高市清治：シニア居住の新メニューを探せ、日経アーキテクチュア第767号、pp38-61、2004.4-5
- 18) 井上由紀子・大原一興：住民によるケアサービスと住宅の地域への開放化に関する考察、高齢期における地域生活に関する研究その3、日本建築学会計画系論文集 第587号、pp1-8、2005.1
- 19) 境野・富田・三浦・高田：グループハウス入居高齢者の生活実態への考察、高齢者グループリビングにおけるケアシステムに関する研究その1、日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿)、pp147-148、2005.9